

隠れた「チャイナタウン」

——新宿区大久保

神宮寺 航一

「東京・新宿区の大久保エリア、つまり JR 山手線の新大久保駅や中央線の大久保駅の周辺¹で暮らす外国人といえば、どの国の人々ですか？」という問いがあったとしよう。多くの人は、韓国・コリアの人々を思い浮かべるのではないだろうか。大久保は日本有数のコリアタウンとして知られており、韓国料理やコスメなどを求める観光客で年中混雑している。また、ハラル食材店が集まる大久保駅近くの「イスラム横丁」の存在を知る人は、南アジアや中東の人々を思い浮かべるかもしれない。一方で、大久保を歩いていると必ず耳にする外国語が、中国語である。大久保は、中国系住民の生活インフラが揃い、また中国料理の名店が集まる街として話題を集める、隠れた「チャイナタウン（中華街）」なのである。

新大久保駅の西側から小滝橋通りにかけてが、大久保でも特に中国系の店舗が密集するエリアである。ここには、中華物産店（写真 1）や、中国語で接客する美容室（写真 2）などが軒を連ねる。高田馬場駅近くに住む筆者の知人の中国系の女性によると、「馬場でも中国のものが買える店はあるけど、こっちの方が品揃えがいいので普段から大久保に来る」のだという。新大久保駅近くの大きな教会では、中国語の礼拝も行われている（写真 3）。レストランも多く、中国本国で人気の延辺料理²（写真 4）から、マレーシアの華人料理である肉骨茶（写真 5）まで、地域性に富んだ本格的な中国料理を味わえる。

¹ 本稿での「大久保」は、新宿区百人町一～二丁目および大久保一～二目を指すこととする。

² 朝鮮半島の料理にルーツをもつ中国延辺朝鮮族自治州の料理を指す。



写真1 大久保駅近くの中華物産店 (2024年2月26日、筆者撮影)



写真2 中国語で接客する美容室 (2024年2月26日、筆者撮影)



写真3 教会の中国語礼拝の告知 (2023年12月19日、筆者撮影)



写真4 中国で人気の延邊料理を提供する料理店 (2024年2月26日、筆者撮影)



写真 5 肉骨茶が看板料理のレストラン（2024年3月6日、筆者撮影）

大久保駅の南口近くには、ひととき存在感を放つカラフルな建物がある（写真 6）。これは「東京媽祖廟」という台湾系の寺院で、いつも多くの参拝者で賑わっている。廟の隣には、台湾からご本尊を分霊してきたという本格的な寺院も併設されている。大久保は、東京で暮らす中国系の人々の心の拠り所が存在する場所でもあるといえる。



写真 6 東京媽祖廟 (2022 年 12 月 13 日、筆者撮影)

韓国系の店舗が密集する新大久保駅東口から明治通りにかけては、「コリアタウン」への観光客が真っ先に目指すエリアであるが、ここでも近年中国系店舗の進出が進んでいる。2023 年 12 月には、池袋に本店を置く中国料理フードコートの支店が開業した (写真 7)。本店はテレビでも度々取材される有名店であり、今後このような中国系店舗が増加していくと、このエリアのコリア一色のイメージが変化していくだろう。



写真7 開業間もない中華フードコート（2024年2月26日、筆者撮影）

大久保や、隣接する歌舞伎町、高田馬場に日本語学校が密集していることが、近年の中国系住民の大久保への集住の大きな要因である。一方で、池袋[山下 2010]や西川口[Jinguji 2023]のような近隣の中国系の人々が集住するエリアでは、現地で街をチャイナタウンとして振興させようとする動きがあったのに対して、大久保では筆者の知る限りではそのような活動は見当たらない。また、ある大久保の社会福祉に関わる女性は、「大久保には中国系の高齢者が非常に多いはずなのに、地域のコミュニティにも顔を出さないし、その存在が全く見えてこない。助けを求める人はいるはずなのに、すごく不安」だと話す。大久保は、複合的な意味で「隠れた」チャイナタウンといえるのかもしれない。

参考文献

山下清海 2010『池袋チャイナタウン——都内最大の中華街の実像に迫る』洋泉社。

JINGUJI, K. 2023. "The Image of China" and Subjectivity of People's Ethnic Representation Choices: A Case Study on Nishi-Kawaguchi New Chinatown, Japan. *Journal of Language and Culture* 42(2): 52-77.

(じんぐうじ・こういち 東京都立大学大学院)